

## 国文学研究の自明性を疑うために

あとがきにかえて

和田敦彦

このところ、ずっと第二次大戦下の日本文学「研究」を読んでまとめる作業をしていました。特に早稲田大学の国語学や国文学研究、教育についてです。もともとは戦時下でアカデミズムがどのように再編されていくのかを追っていたのですが、また、それはこの時期の日本の対外文化政策や東南アジア諸国へのまなざしの変化とあわせて関心をもっていたわけなのですが、肝心の自分の居る場所、この大学の国文学研究の状況や変動について、いまだ十分に明らかになっていかなかったためです。

理系偏重や人文学の縮小再編が問題化して久しいですが、同じ事が大々的に起こっていたのが戦時下です。早稲田大学では理工系の学科が次々と設置され、文科系の学科は縮小再編されていきます。ただ、そうした中でも重視されていく人文科学の領域もありました。国文学の研究がそうです。今からは想像もつかないかもしれませんが、一九四四年に専攻制を廃した文学部は、学部全体の必修科目として「国体の本義」を設けます。その担当となっていたのは、戦前の早稲田大学で国文学研究を牽引してきたとも言える五十嵐力です。この教育学部の前身でもある高等師範部の科目も担当していました。

日本文学「研究」の戦争責任というテーマは、別に新しいテーマではありません。戦争直後からそれは学界の中でもなされていきます。また、もう二〇年ほど前になりますが「奇妙なことに国文学者は、文学者の戦争を問うことはあっても、国文学者自身については大方不問にしている」（『批評空間』一九九八年一月）という村井紀の問題提起を受け、文学研究の領域でも研究がなされています。こうした問題意識は、文学研究自体の制度化していかうとする方法に広く引き継がれていると思いますし、文学研究のみならず、民俗学や人類学、日本語教育学などの領域でも、戦時期についてとらえなおす優れた研究がその後、数多く出てきました。

ただ残念なことに、早稲田大学における戦時期の国文学研究については、いまだ十分な研究がなされていないのが現状です。帝国大学を中心とした官学アカデミズムはしばしば批判の対象となってはきましたが。それはひとえに私自身の怠慢にもよります。私は（アカデミズムを含めた）読書の歴史に関心をもってきたわけですから、国文学研究という読書の共同体についても当然関心の対象でしたし、こうした批判的な研究はその内側からまずなされなくてはならないものですから。というわけで、ずっとこの時期の国文学研究者の論文や書籍、学術誌などを読んでいたわけです。

それについてはまた具体的に報告することになるかと思いますが、そうした作業をしている中で感じたことの中から、少しここで書いておこうと思います。それは、日本文学を研究することの意義や価値の問題です。この冊子（『研究と資料』）には、日本文学を研究する大学院生の成果が並んでいます。その執筆者一人一人に、その論文を出すことにどういう意味があるのかについて考えてほしいし、疑ってほしいと思っています。

日本文学を研究するだけでも十分な意義を持ち得たのが戦時下でした。例えば小説に向き合って、その中から「美」や「精神」を評価すれば、それは日本独自の精神や固有の民族性を充填するため素材になり得ました。独自性や固有性は比較を前提としてのみ可能な言い回しですが、日本人が日本文学を日本語で研究するのだから当然独自性をもつ

ている、というような閉鎖的な回路がくり返し用いられます。こうした説明されるべきものを用いて説明する、という「悪しき循環」論法は、終戦直後から批判されてきました。むろんこうした形で一括して当時の研究をくくることはできません。むしろ必要なのは、それぞれの研究者の思考に寄り添いながら、具体的な戦争協力の、あるいは抵抗のありようをたどっていくことかと思えます。

現在の日本文学を研究する必然性や当然さは、むろん当時と同じではありません。ただ、日本文学研究や教育自体の制度化、一般化が進む中で、日本文学を研究すること自体への疑いや問い直しが容易でないのは、やはり同様です。当たり前のことですが、ある小説を自身で深く読み、そこに価値を見いだしたからといって、その読み方が自分以外の人にとって価値や意味をもつというわけではありません。自分にとっての日本文学研究が、どういう範囲の資料を使って、どういう読み方をする事なのか、を少し距離をとりながら見直し、議論する機会はとても大事だと思います。自身でもいまだにそのことで自問する機会が絶えません。そういう意味で、それぞれの論考を互いに読み、率直にその意義を議論しあう場を大事にして頂ければと思います。